



Title	La description d'Émile Zola : la réflexion théorique et Les Rougon-Macquart
Author(s)	高橋, 愛
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49115">https://hdl.handle.net/11094/49115</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	たか 高 はし 橋 あい 愛
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 6 9 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	La description d'Émile Zola : la réflexion théorique et <i>Les Rougon-Macquart</i> (エミール・ゾラと描写の射程—その理念、『ルーゴン・マッカール叢書』における実像—)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 柏 木 隆 雄 (副査) 教 授 上 野 修 教 授 和 田 章 男

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は 1867 年『テレーズ・ラカン』を最初の小説として出発したエミール・ゾラが、1872 年の『ルーゴン家の運命』から始めて 1892 年の『壊滅』にいたる、いわゆる『ルーゴン・マッカール叢書』と称される小説群を執筆する過程に焦点をあて、たゆまぬ努力で続けられたゾラ文学の形成が如何にして行われたか、彼の文学思想とその実践が如何に行われたか、同時代の文学者、芸術家からどのような影響を受けたか、ゾラが目指した理想はいかなるものであったかを、実際のテキストに即して、その顕現を見ようとしたものである。仏語 A4 判 295 頁、全 3 部、8 章と序文および結論に挿図、文献、書誌、年譜からなる。

第 1 部は新しい文学の創造を常に意識していたゾラが、その意図の下に影響あるいは関心をもった文学者たち、バルザック、スタンダール、フロベールについて、彼らの文学のありようとそれに対するゾラの評価を検討し、彼がどのようにそれらを自作の執筆に活かしたかを述べる。バルザックの人物再登場法を駆使しての『人間喜劇』は、「人間社会」と「動物社会」の類縁性が現実描写を可能にする方法を示唆して、ゾラの社会環境の中にある人間の現実を描く手法へ大きな手がかりを与え、「小説は動く鏡」とするスタンダールについては、その文学的営為を評価しながら簡潔無比を標榜する彼の文体や心理分析について批判的な立場をとって、スタンダールの「心理学的な」視点よりも、むしろ「生理学的な」方向を取るに至ったとする。ゾラが深く影響を蒙り、実際にも教示を得たのはフロベールで、その細密な観察と徹底的な資料を渉猟しての構想は、ゾラの「科学主義」的なリアリズムとそれを芸術として表出する創作方法に示唆するところが大きかったと説く。

第 2 部では、如何に描くか、に強い意欲を持つゾラが、若い時から深い関心をもっていた美術と彼の文学との関わり、相互に深く影響しあった芸術家たち、マネやセザンヌ、その他の印象派画家たちとの交流を探る。そして彼らの絵画とゾラの小説の間に見られる描写法の類似、とりわけ印象派の画家たちが生み出した色の構成、人物描写、明暗の効用が、『ナナ』や『獣人』など『ルーゴン・マッカール叢書』中の各場面の中でどれほど活かされているかを実証し、対象を見て描く画家たちの態度にもまた共鳴するが、しだいに彼らの主張から離脱する過程を両者を比較しつつ辿る。

第 3 部は、いわゆる「自然主義」と称される文学運動、その中心にいたとされるゾラ小説の原理と実践さらにはゾ

ラが最終的に目指したものを論じる。ゾラは 19 世紀後半から精密に、かつ実証的に自然の現象を考究する科学を知り、その成果としての鉄道や建築物にも関心を払い、それを自己の文学の根本的な原理として一般的に忌避される人間の生理現象、生死の問題を文学の中で正確に表現しようとした。論者はゾラの処女作『テレーズ・ラカン』から『ルーゴン・マッカール叢書』中の『金』、『獣人』、そしてとりわけ普仏戦争を題材にした『壊滅』のテキストを精密に読解し、ゾラの「自然主義」的な描写や主張の根拠となるものを具体的な行文で指摘しながら、それらが時代の変化とともに、やがて後輩の作家たちの批判に会うときにゾラがそれらを容認しつつ、彼自身もまた新しい文学の創造を心がけるという、ゾラ特有の「進歩主義」にその芸術の根本を見て総括する。

## 論文審査の結果の要旨

ゾラはバルザック、スタンダール、フロベールとともにフランス 19 世紀を代表する小説家である。バルザックの『人間喜劇』に倣う『ルーゴン・マッカール叢書』は、バルザックのそれが作品群がほぼ出来上がってからの構成であったのに対して、ゾラは執筆のごく初期から一定の綿密なプランでもって、一作一作第二帝政下のフランスの人間と社会を克明に写す気概をもって書き上げられたもので、そのあまりに練られた構想のゆえに、かえって人工的な配置や描写を批判されることもあるが、現代においても多くの読者を獲得している点にもゾラ文学の大きさを窺うことができよう。論者は長大な小説群からなる『ルーゴン・マッカール叢書』に早くから取り組み、その描写の方法と実践に深い関心をもって研究を行ってきた。ゾラが先行する文学者たちからどのような糧を得てきたかは、ゾラ文学の本質を知る上で欠かすことの出来ない調査である。論者はゾラの『小説論』や批評の類から彼が範とする作家バルザック、スタンダール、フロベールに関する記述を精査し、それぞれの作家に対するゾラの評価を指定するだけでなく、彼の評論と実作とが乖離するという従来の批評に対して、ゾラの実作においてその批評がどのように実践されているかを具体的に指摘してゾラの批評の意義を明らかにしてみせたことをまず第一に評価したい。

そのことは同時代の芸術家との関係についても言える。マネがゾラの肖像を描いていることでも明らかのように、ゾラが世に出る以前に既成のアカデミー芸術と訣別して、独自の作品を発表しているマネは、ゾラがその美術批評でその真価を認めてこれを称揚した画家である。セザンヌとの友情の顛末もよく知られている。従来幾つかのゾラの描写がマネやセザンヌなどの描法と重なることは指摘されていたが、論者は第 1 部と同様ゾラ的美術批評を吟味した上で、ゾラの小説においてどのような形で画家の筆致が生かされ、彼の文章の中に活かされているかを、多くの図版を援用しながら、克明に例示して、両者の類縁関係を具体的に指摘し得た。またそうした類似の検討だけでなく、ゾラの芸術観と印象派画家たちの意識の乖離を見て、ゾラが彼らから離れていく過程をも辿っていることも、ゾラの文学軌跡を追う視点から見えてくるもので、この点も論者の努力が評価される。

また本論全体を通じて、膨大な『ルーゴン・マッカール叢書』の各編に細かく眼を配り、縦横に論点に適う場面を取り上げ、ゾラの作品が同時代の文学、芸術、そして 19 世紀後半のフランスの現実をどのように写し取っているかを論じ得たことも、本論の特色であるが、とりわけ第 3 部において、ゾラ文学全体を鳥瞰し、さらに晩年のゾラ文学の変遷と同時代文学との関係を論じて、『ルーゴン・マッカール叢書』以後の展望を開いていることも、今後の研究に対して期待を抱かせる。

以上本論は評価すべき点は多いが、3 部構成の記述において、各部は綿密に記述されているものの、相互の論理的連関にお言葉の費やす必要が認められ、取り上げる作品についても各部でそれぞれ意味合いが異なる場合もあって、これを今少し整理して一貫した流れで記述できれば一層論としての統一が図られただろう。また「自然主義」や「進歩」などの概念が、やや安易に使われていて、論者なりの定義をもっと詳しく論じて論を展開すべきだろう。またゾラの政治的心情や時代背景など、今少し詳しく説明する必要もあるが、ゾラの描法について詳述した本論は十分に博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。